【論文】

現代日本漢語における
ハ行子音の半濁音化について

舘　野　由香理

P-sound of Ha-gyo consonants in Modern Sino-Japanese

TATENO, Yukari

要旨：「半濁音化」とは、漢語に関していえば「絶品ゼッピン」「審判シンパン」のように、入声音・鼻音の後でハ行子音が p 音になることをいう。しかし、入声音・鼻音に続いたハ行子音がすべて半濁音化するわけではない。唇内入声音-p（例：「執筆シッピツ」）・舌内入声音-t（例：「吉報キッポウ」）および唇内鼻音-m（例：「音符オンプ」）・舌内鼻音-n（例：「散髪サンパツ」）にハ行子音が続く場合には規則的に半濁音化するのに対して、喉内入声音-k（例：「国宝コクホウ」）と喉内鼻音-ŋ（例：「公平コウヘイ」）にハ行子音が続く場合には規則的に半濁音化しない。助数詞の場合には「一発イッパツ」「七発シチハツ」、「三発サンパツ」「三本サンボン」のように、半濁音化するか否かには規則性が見られず複雑である。小論では、現代漢語における半濁音化の実態について調査し、それをもとに半濁音化の条件について分析する。
キーワード：現代漢語、ハ行子音、半濁音化、促音化、濁音化

0．はじめに

日本語に特有の「清」「濁」という対立概念は、「無声」「有声」と相関する。しかし、清＝無声，濁＝有声ではない。清音＝unmarked、濁音＝marked という関係にあり、清・濁の対立が成り立つのは t, d のような無声・有声の区別をもつ子音に限られる。濁とされるのは、無声・有声の対立をもつ子音体系のうちの有声音だけである。従って、ア行・ナ行・マ行・ラ行な

ど、母音音節や鼻音にはじまる音節あるいは r 行音などは、有声であるにもかかわらず、清音とされる。

これらのうち、ハ行子音については特別な状況がある。現在、ハ行子音は清音＝/h/、濁音＝/b/であるが、歴史的には

清音　　p ＞ Φ ＞ h

濁音　　b　→　b

とされる。/h/は/p/が変化したものであり、/b/は変化せず古い形がそのまま現在にも保存されている。

では、現在の p（パ行子音）はどう解釈されるべきであろうか。日本語は、「澄んだ音（清音）⇔ 濁った音（濁音）」という捉え方をしており、そのような対立において、無声子音の p は「澄んだ音」に含められることが予想されるにもかかわらず、「半濁音」という「濁った音」のカテゴリーに含められている。これは濁音が「バ」のように付加記号「゛」で表されるのと同様に、半濁音は「パ」のように付加記号「゜」で表されることと関係があるように思われる。すなわち、パ行子音が「濁」のカテゴリーに入れられるのは、この音に濁った印象があるからではなく、濁音と同じような付加記号が用いられることが、半濁音というグループに位置づけされている理由であろう。

次に、日本語におけるパ行音のあらわれ方を見ておきたい。特徴的に見られるのはオノマトペである。例えば、

パラパラ ⇔ バラバラ、ペラペラ ⇔ ベラベラ、ポロポロ ⇔ ボロボロ

のように、バ行音と対になり一定の表現的効果が認められる。

オノマトペを除く和語では、

ひっぱる（引っ張る）、しょっぱい（塩っぱい）、さっぴく（差っ引く）

のように、促音の後にあらわれる。

いわゆる外来語の場合は、

ポイント（point）、スプリング（spring）、マップ（map）

のように、p 音を写す場合にあらわれる。

一方、漢語の場合は「発表ハッピョウ」「散歩サンポ」のように入声音や鼻音の後にハ行子音が続くとパ行子音（p 音）になる。これが「半濁音化」と言われるものである。ちなみに、現代の日本字音には「パ」ではじまるものは存在しない。中国原音には存在したが、日本字音では日本語化する過程で p＞Φ＞h となったからである。

漢語について詳しく見ると、

入声音＋ハ行子音	唇内入声音-p	圧迫アッパク
	舌内入声音-t	絶品ゼッピン
	喉内入声音-k	告白コクハク
鼻音 ＋ハ行子音	唇 内 鼻 音-m	金髪キンパツ
	舌 内 鼻 音-n	先鋒センポウ
	喉 内 鼻 音-ŋ	明白メイハク

のように、唇内入声音・舌内入声音および唇内鼻音・舌内鼻音にハ行子音が続く場合には規則的に半濁音化するが、喉内入声音と喉内鼻音にハ行子音が続く場合には規則的に半濁音化しない。ただし、喉内入声音に続く場合には「北方ホッポウ」のような例外も存在する。

さらに助数詞では、半濁音化するか否かには規則性がみられず複雑である。例えば「本ホン」の場合は、

一本イッポン、二本ニホン、三本サンボン、四本ヨンホン・シホン、
五本ゴホン、六本ロッポン・ロクホン、七本シチホン、
八本ハッポン・ハチホン、九本キュウホン、十本ジッポン

のように、舌内入声音-t である「一」「七」「八」に「本」が続く場合は半濁音化することが予想されるが、「七」に続く場合は原則に反して半濁音化せず、「八」に続いた場合は半濁音化するものと半濁音化しないものとが併存する。喉内入声音-k である「六」に続くハ行子音は半濁音化しないことが期待されるにもかかわらず半濁音化した形を有する。唇内鼻音-m である「三」は半濁音化せず濁音化する。

以上は概略であるが、現代漢語における詳細については、これまでに記述・解釈されていない。本稿では、現代漢語における半濁音化の実態について調査し、それをもとに半濁音化の条件について分析する。

１．半濁音化に関する従来の指摘（先行研究）

半濁音化について、小松（1981）は、

> 「人品」「折半」「分配」「突風」……のように、現代語では鼻音や入声音のあとに続く漢字音形態素が、［p］の形をとってあらわれる。和語型の場合と異なり、漢字音には濁音に始まるものが豊富にあるので、下位要素が濁っていても、本来の濁音なのか連濁によるものなのかが明らかでない。したがって、「やま＝どり」の「＝どり」を「とり」に還元して理解するようなことも難しい。カ行・サ行・タ行については、これがどうにもならないが、ハ行の場合には［Φ］と［b］とのほかに、もっぱら和語の擬声語・擬態語に用いられる［p］を余分に持っていたので、これをそのために転用することが可能であった。すなわち、和語型なら連濁でバ行音になるところを、漢語型でパ行音にしておけば、本来の濁音と明瞭に区別できるので、そのもとになった清音の形態素への還元が確実になるのである。

と指摘している。さらに、ハ行子音 h-とパ行子音 p-との関係については、

> ある時期に、ハ行子音の［p］がすべて［Φ］に移行したのではなく、［p］が［Φ］と［p］とに分裂したのである。機能上の要請として破裂音の状態を維持する必要のあった擬態語・擬声語のそれを［p］のままに残して［Φ］に移行したといったもよう。一方、バ行音にもそれが［b］であり続けなければならない機能上の要請があった。そこで、残された［p］が、部分的ながらバ行との間に清濁関係を保持し、

たがいに支えあって両唇破裂音のままに今日まで存続したということになる。

と指摘している。これ以外に本稿のテーマに直接関係する研究は見出し難い。従って、この小松（1981）説を踏まえて半濁音化の条件を考えてみることとする。まずは現代漢語の実態を明らかにしたい。

２．現代漢語における半濁音化

２．１．調査の対象と範囲

半濁音化の調査・分析には、現代の漢語として一定の頻度数がある漢字を選ぶことにする。具体的には、「常用漢字表」の 2,136 字と「表外漢字字体表」（1,022 字から常用漢字と重複する 196 字を除いた 826 字）に載せられている合計 2,967 字を調査の範囲とする。この 2,967 字のうち、ハ行子音で始まる漢字は 257 字ある。その中から、漢語の下字にハ行子音がくる漢語の例がある 203 字を調査の対象とする [1)]。漢語の調査に使用するのは以下の漢和辞典である [2)]。

小川環樹ほか編（1994）『角川新字源（改訂版）』角川学芸出版
小林信明編（2003）『新選漢和辞典（第七版）』小学館
藤堂明保・加納喜光編（2005）『学研新漢和大字典』学習研究社

２．２．調査結果

上記の漢和辞典に収録されている漢字 203 字について調査し、それを前接の韻尾ごとに分けて示した。結果については表１～２に掲げる。なお、すべての漢語を示すのはスペースが許さないので、各韻尾につき 10 語のみ示すにとどめる。助数詞については「発ハツ」と「本ホン」のみ示す。

まず、入声音に続くハ行子音の漢語について見ていく。

表１　入声音に続くハ行子音の漢語

唇内入声音-p ＋ハ行子音	舌内入声音-t ＋ハ行子音	喉内入声音-k ＋ハ行子音
執筆シッピツ	吉報キッポウ	国宝コクホウ
湿布シップ	密封ミップウ	速報ソクホウ
立腹リップク	出費シュッピ	告白コクハク
接吻セップン	突破トッパ	続編ゾクヘン
圧迫アッパク	脱皮ダッピ	爆発バクハツ
法被ハッピ	潔癖ケッペキ	宿泊シュクハク
合併ガッペイ	発表ハッピョウ	幕府バクフ
雑費ザッピ	鉄壁テッペキ	激変ゲキヘン
急迫キュウハク	切符キップ	直筆ジキヒツ
脅迫キョウハク	絶品ゼッピン	黙秘モクヒ
十発ジッパツ・ジュッパツ	一発イッパツ	六発ロッパツ・ロクハツ
	七発シチハツ	
	八発ハッパツ・ハチハツ	
十本ジッポン・ジュッポン	一本イッポン	六本ロッポン・ロクホン
	七本シチホン	
	八本ハッポン・ハチホン	

表１より、唇内入声音-p にハ行子音が続く場合は、「急迫キュウハク」「脅迫キョウハク」のような-u 型の唇内入声音を除いて、

「執筆シッピツ」「湿布シップ」「立腹リップク」「接吻セップン」

「圧迫アッパク」「法被ハッピ」…

のように、原則的に半濁音化する。

舌内入声音-t にハ行子音が続く場合は、

「吉報キッポウ」「密封ミップウ」「出費シュッピ」「突破トッパ」

「脱皮ダッピ」「潔癖ケッペキ」…

のように、唇内入声音-p にハ行子音が続く場合と同様、原則的に半濁音化する。

一方、喉内入声音-k にハ行子音が続く場合は、

「国宝コクホウ」「速報ソクホウ」「告白コクハク」「続編ゾクヘン」

「爆発バクハツ」「宿泊シュクハク」…

のように、原則的に半濁音化しない。

入声音に続くハ行子音の漢語を見ると、唇内入声音-p と舌内入声音-t に続くハ行子音は原則的に半濁音化するのに対し、喉内入声音-k に続くハ行子音は原則的に半濁音化しない[3)]。

次に、鼻音に続くハ行子音の漢語について見ていく。

表２　鼻音に続くハ行子音の漢語

唇内鼻音-m＋ハ行子音	舌内鼻音-n＋ハ行子音	喉内鼻音-ŋ＋ハ行子音
音符オンプ	散髪サンパツ	公平コウヘイ
心配シンパイ	神秘シンピ	往復オウフク
審判シンパン	隠蔽インペイ	豊富ホウフ
妊婦ニンプ	先輩センパイ	政府セイフ
金髪キンパツ	民法ミンポウ	商品ショウヒン
潜伏センプク	山腹サンプク	明白メイハク
添付テンプ	断片ダンペン	強風キョウフウ
岩壁ガンペキ	腕白ワンパク	方法ホウホウ
品評ヒンピョウ	乾杯カンパイ	情報ジョウホウ
店舗テンポ	伝票デンピョウ	蒸発ジョウハツ
三発サンパツ		
三本サンボン		

表２より、唇内鼻音-m にハ行子音が続く場合は、

「音符オンプ」「心配シンパイ」「審判シンパン」「妊婦ニンプ」

「金髪キンパツ」「潜伏センプク」…

のように、原則的に半濁音化する。

舌内鼻音-n にハ行子音が続く場合は、

「散髪サンパツ」「神秘シンピ」「隠蔽インペイ」「先輩センパイ」

「民法ミンポウ」「山腹サンプク」…

のように、唇内鼻音-m にハ行子音が続く場合と同様、原則的に半濁音化する。

一方、喉内鼻音-ŋ にハ行子音が続く場合は、

「公平コウヘイ」「往復オウフク」「豊富ホウフ」「政府セイフ」

「商品ショウヒン」「明白メイハク」…

のように、原則的に半濁音化しない。

鼻音に続くハ行子音の漢語を見ると、唇内鼻音-m と舌内鼻音-n に続くハ行子音は原則的に半濁音化するのに対し、喉内鼻音-ŋ に続くハ行子音は原則的に半濁音化しない。

助数詞について見ると、唇内入声音-p である「十」にハ行子音の助数詞が続く場合は「十発ジッパツ」「十本ジッポン」のように原則通り半濁音化する。舌内入声音-t にハ行子音の助数詞が続く場合を見ると、「一」は「一発イッパツ」「一本イッポン」のように原則通り半濁音化するが、「七」は「七発シチハツ」「七本シチホン」のように原則に反して半濁音化せず、「八」は「八発ハッパツ・ハチハツ」「八本ハッポン・ハチホン」のように半濁音化するものと半濁音化しないものとが併存する。喉内入声音-k である「六」に続くハ行子音は半濁音化しないことが予想されるが、「六発ロッパツ・ロクハツ」「六本ロッポン・ロクホン」のように助数詞に限って半濁音化する形を有する。唇内鼻音-m である「三」にハ行子音が続く場合は「三発サンパツ」のように半濁音化するものと「三本サンボン」のように濁音化するものとが併存する。ハ行にはじまる助数詞は、原則に反する例が多く見られ、複雑である。

以上、調査結果をまとめると、唇内入声音・舌内入声音および唇内鼻音・舌内鼻音に続くハ行子音は原則的に半濁音化するのに対し、喉内入声音と喉内鼻音に続くハ行子音は原則的に半濁音化しない。但し、助数詞にはこの原則が認められず複雑である。喉内音に限って半濁音化しない理由、それから助数詞については検討する必要がある。

このほか、反規則的に半濁音化する漢語（「北方ホッポウ」など）や、半濁音化しない漢語（「溢浮イッフ」など）、濁音化する漢語（「煎餅センベイ」など）についても検討したい。

３．半濁音化の条件

３．１．入声音に続くハ行子音

２．２．で述べたように、唇内入声音-p と舌内入声音-t にハ行子音が続く場合は原則的に半濁音化するのに対し、喉内入声音-k にハ行子音が続く場合は原則的に半濁音化しない。その理由を検討する。

まず、唇内入声音-p にハ行子音が続く場合、以下のような組み合わせが考えられる。

唇内入声音		ハ行子音
p		p
pu	——	Φ
Φu		h
u		

なお、p, pu, Φu, u に関していえば、p＞pu＞Φu＞u のような歴史的関係がある。

ちなみに、唇内入声音に関していえば、p－p (Φ) のような同じ無声の唇音が連接する場合は、必ず促音化する。

例）　執筆シッピツ　sip － pitsu
　　接吻セップン　sep － pun
　　圧迫アッパク　ap － paku

p－p (Φ) のような関係は、半濁音化するための条件であり、同時に促音化するための条件でもある。従って、半濁音化と促音化は一体となった関係であるといえる。現に、母音化した唇内入声音に続くハ行子音は、原則として半濁音化・促音化のどちらも起こさない。

例）　急迫キュウハク　kju － haku

脅迫キョウハク　kjou － haku

これは、前接する唇内入声音が母音化したことにより、p－p (Φ) のような関係を保つことができなくなり、前接音の支えがなくなった後続音 p (Φ) 音が固有語と並行して非唇音化を起こした結果であると考えられる。

従って、唇内入声音に続くハ行子音が半濁音化するのは唇音が連続する p－p (Φ) のような関係、すなわち唇内入声音の p とハ行子音の p (Φ) が結合して唇音性が保存された結果だと考えるのが妥当であるから、半濁音と直前の子音との関係は、

唇内入声音		ハ行子音	
p	——	p (Φ)	（法被 hap - pi）

のように、開音節化ないし母音化していない唇内入声音 p と、p＞Φ＞h のような変化をまぬがれた p（もしくは p 音になることができる Φ）との組み合わせ以外、考え難い。

次に、舌内入声音-t にハ行子音が続く場合は、以下のような組み合わせが考えられる。

舌内入声音		ハ行子音
t ti (tʃi) tu (tsu)	——	p Φ h

なお、t, ti, tu に関していえば、t＞ti＞tʃi,　t＞tu＞tsu のような歴史的関係がある。

このうち、舌内入声音-t に続くハ行子音が半濁音化するためには、唇内入声音-p に続くハ行子音が半濁音である場合と同じ条件、すなわち、

χ － p (Φ)　　χ = p, もしくは p になることができる子音

であることが予想される。開音節化した ti や tu にハ行子音が続いた場合、開音節化ないし母音化した唇内入声音の場合と同様に、後続音 p (Φ) 音は固有語（日本語）に起きた非唇音化の影響を受けて ti－h, tu－h のようになり、後続するハ行子音は半濁音化しないと考えられるからである。従って、舌内入声音-t に続くハ行子音が半濁音化するには、

舌内入声音		ハ行子音
t	——	p (Φ)

のような関係しか残らない。しかし、t－p (Φ) のような関係では半濁音化しない。なぜなら t は唇音ではなく歯茎音であり、p (Φ) が唇音性を保存する条件を満たせないからである。舌内入声音-t に続くハ行子音が半濁音化する場合も p－p (Φ) のような関係にならなければならない。

舌内入声音-t とハ行子音が p－p (Φ) のような関係を作るためには、唇内入声音-p に続くハ行子音が半濁音である場合と同様に、舌内入声音-t も特定の条件下（無声子音が続く場合）で促音化したと考える必要がある。現に、「吉報キッポウ」「密閉ミッペイ」…のように、舌内入声音-t は無声子音が続くと促音化を起こしているから、t と p (Φ) の関係は、

t－p (Φ)　→　/Q/－p (Φ)

/Q/ = p　→　p－p (Φ)

のようになり、舌内入声音-t でも p－p (Φ) のような関係を作り出すことができる。すなわち、舌内入声音-t は促音化し後続子音 p (Φ) との間に p－p (Φ) のような関係を作ることによって、ハ行子音の唇音的特徴を保存させたと見なされる。

ここで「促音」の性格を確認しておきたい。促音の持続部は、後続子音の調音点における閉鎖音または摩擦音である。例えば「絶（舌内入声音）」

が促音化する場合は、

例）	絶品ゼッピン	zep	― pin
	絶対ゼッタイ	zet	― tai
	絶景ゼッケイ	zek	― kei

のように、絶［zet］の t が後続の無声子音の影響を受けて、p－p，t－t，k－k のように同じ無声子音を持続させる関係を作り出している。

この促音のように、舌内入声音-t は後続するハ行子音 p (Φ) に影響されて、t－p (Φ) から p－p (Φ) のような関係を作り出すことができたと推測できる。

一方、喉内入声音-k はハ行子音が続いても原則として半濁音化しない。なぜなら、喉内入声音は開音節化が早かったために p－p (Φ) のような関係が作れなかったからと推測できる。ちなみに、喉内入声音にハ行子音が続く場合は、以下のような組み合わせが考えられる。

喉内入声音		ハ行子音
k	——	p
ki		Φ
ku		h

なお、k, ki, ku に関していえば、ki，ku は k が開音節化したものである。

このうち、喉内入声音-k に続くハ行子音が半濁音化するための条件は、喉内入声音-k が開音節化せず入声の特徴を保存している場合、すなわち、舌内入声音-t と同様に促音化する場合であると考えられる。その場合、入声音-k は後続する p (Φ) の影響を受けて k－p (Φ) から p－p (Φ) のような関係になるはずであるが、以下のように、喉内入声音-k に続くハ行子音は半濁音化しない。

喉内入声音		ハ行子音	
ki	——	h	（激変 geki – hen）
ku			（爆発 baku – hatsu）

これはつまり、喉内入声音-k は入声音-p, -t, -k の中で最も早く開音節化したためと推定される。その結果、p－p (Φ) のような関係を作ることができず、従って後続するハ行子音は半濁音化しなかったと考えられる。

３．２．鼻音に続くハ行子音

２．２．で述べたように、唇内鼻音-m と舌内鼻音-n にハ行子音が続く場合は原則的に半濁音化するのに対し、喉内鼻音-ŋ にハ行子音が続く場合は原則的に半濁音化しない。その理由を検討する。

鼻音韻尾のうち、唇内鼻音-m と舌内鼻音-n は日本語化の過程を通じて、

唇内入声音	林リン	-m ＞ /N/
舌内入声音	山サン	-n ＞ /N/

のように撥音/N/となり、鼻音が保存されている。

ところで、撥音/N/の音価は促音/Q/と同様に後続の子音に影響される。そのうち、後続子音が鼻音の場合は、

例）	新聞シンブン ―	モ	siNbum ― mo	（唇音）
		ノ	siNbun ― no	（歯茎音）
		ガ	siNbuŋ ― ŋa	（軟口蓋音）

のように、撥音/N/は後続鼻音の持続部として実現される。後続子音が鼻音でない場合でも、

例）	乾杯カン ― パイ	kam ― pai	（唇音）
	鑑定カン ― テイ	kan ― tei	（歯茎音）
	関係カン ― ケイ	kaŋ ― kei	（軟口蓋音）

のように、撥音/N/は後続子音の調音点に影響される。

つまり、鼻音に続くハ行子音が半濁音として実現される可能性があるのは p 音そのもの、あるいは Φ 音（の P 音化）と考えられるから、鼻音に続く半濁音は、

/N/ ―χ　　χ = p (Φ)

のように表され、/N/は p (Φ) 音と調音点が同じになる m 音でなければな

らない。すなわち、鼻音に続くハ行子音の半濁音化は/N/=m となり、m－p (Φ) のように相互が支えあって唇音性を保存できる関係になることが条件である。

一方、喉内鼻音の場合は、

-ŋ´　＞ -ĩ　＞ -i　　明メイ

-ŋ´ -ŋ ＞ -ũ ＞ -u　　東トウ

のように非鼻音化したために、後続子音と支え合って m－p (Φ) と平行した関係を保てなくなった。このように喉内鼻音-ŋ´ -ŋ は非鼻音化して-i,-u になった結果、i－p (Φ), u－p (Φ) のような関係になり、後続音 p 音または Φ 音は前接音の支えがなくなったために、固有語（日本語）に起きた p 音の非唇音化の影響を受けて i－h, u－h のような関係になってしまったと考えられる。

例）　明白メイ ― ハク　　mei ― haku

東北トウ ― ホク　　tou ― hoku

このことから、鼻音性を今日に保存している唇内鼻音・舌内鼻音に対して、喉内鼻音は半濁音化の発生以前に、非鼻音化を起こしたということが推測される。

ここで、「半濁音化」について確認しておきたい。「半濁音化」とは、漢語に関していえば「絶品ゼッピン」「散歩サンポ」のように、促音（入声音）・鼻音の後でハ行音が p 音になることをいう。ハ行音は p＞Φ＞h のように変化したから、半濁音の元になるハ行子音は p, Φ, h である。しかし、このうち h が p に変化する音韻論的環境は想定しがたい。すなわち、p 音として実現される可能性があるのは、元の（Φ に変化する前の）p または（p が変化した後の）Φ に限定されるから、それが元の p ならば、従来「半濁音化」と考えられていた p 音は、バ行音（b 音）と同様に本来の唇音 p が保存されて生き残ったものであることになる。

３．３．助数詞

２．２．で述べたように、ハ行にはじまる助数詞が半濁音化するか否かは原則に反するものが多い。その理由を検討する。

助数詞に前接する数詞の韻尾について見ると、

	入類（入声音）	陽類（鼻音）	陰類
唇内	十	三	二，四，五，九
舌内	一，七，八	——	
喉内	六	——	

のようになる。このうち、入類（入声音）と陽類（鼻音）にハ行にはじまる助数詞が続く場合、半濁音化するか否かについて見ると、表３のようになる。

なお、助数詞は「常用漢字表」と「表外漢字字体表」に載せられている合計 2,967 字のうち、助数詞として認められるハ行子音の漢字 19 字（杯・敗・拍・泊・発・版・班・匹・票・品・分・片・辺・遍・編・篇・歩・方・本）を調査の範囲とするが、すべての助数詞を示すのはスペースが許さないので、7 字のみ示すこととする。

表３　数詞（入声音・鼻音）に続くハ行子音の助数詞

数詞 ＼ 助数詞	唇内入声音	舌内入声音			喉内入声音	唇内鼻音
	十	一	七	八	六	三
杯	ジッパイ ジュッパイ	イッパイ	シチハイ ななハイ	ハッポン ハチホン	ロッパイ ロクハイ	サンバイ
発	ジッパツ ジュッパツ	イッパツ	シチハツ ななハツ	ハッパツ (ハチハツ)	ロッパツ ロクハツ	サンパツ
匹	ジッピキ ジュッピキ	イッピキ	シチヒキ ななヒキ	ハッピキ ハチヒキ	ロッピキ ロクヒキ	サンビキ (サンヒキ)
票	ジッピョウ ジュッピョウ	イッピョウ	シチヒョウ ななヒョウ	ハッピョウ ハチヒョウ	ロッピョウ ロクヒョウ	サンピョウ サンヒョウ サンビョウ
分	ジップン ジュップン	イップン	シチフン ななフン	ハップン ハチフン	ロップン ロクフン	サンプン サンブン
遍	ジッペン ジュッペン	イッペン	シチヘン ななヘン	ハッペン ハチヘン	ロッペン ロクヘン	サンベン
本	ジッポン ジュッポン	イッポン	シチホン ななホン	ハッポン ハチホン	ロッポン ロクホン	サンボン

表３をまとめると、以下のようになる。

数詞 ＼ 助数詞	唇内入声音	舌内入声音			喉内入声音	唇内鼻音
	十	一	七	八	六	三
半濁音化	○	○	×	△	△	▲

○…全て半濁音化する　×…全て半濁音化しない

△…半濁音化するものとしないものとが併存する

▲…半濁音化するものと濁音化するものとが併存する

まず、入声音にハ行にはじまる助数詞が続く場合について検討する。

唇内入声音である「十」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、規則的に半濁音化する。これは入声音-p と半濁音 p が結合して p－p (Φ) のような関係を作り、唇音性の保存ができているからだと考えられる。なお、「十」においては「ジッー」のほかに、「ジュッー」となる読みが存在するが、これは数詞「ジュウ」形が促音化したものと見なされる。

舌内入声音である「一」「七」「八」にハ行にはじまる助数詞が続く場合については、個別的に検討する必要がある。ハ行にはじまる助数詞のうち、「一」に続く場合は規則的に半濁音化するが、「七」に続く場合は原則として半濁音化しない。「七」にハ行にはじまる助数詞が続く場合、半濁音化すると語形が「一」に助数詞が続く形と近似して「一」と「七」の識別が妨げられる恐れが大きい。例えば、「一本イッポン」に対する「七本*シッポン」の場合がそれである。ちなみに、中国語では同韻である「一 yī」と「七 qī」の音を聞き分けるのは困難であるため、「一」を「yāo」と発音されることがある [4)]。これと同じ理由で、日本語でも「一イチ」と「七シチ」は同韻であるがゆえに、近似した形になることを避けた可能性が大きい。「一」は「七」よりも先に数えられるので、漢語形が用いられ、後にくる「七」には固有語の「なな」を用いたと考えられる。その結果、後にハ行子音が続いても半濁音化せず「七本（ななホン→シチホン）」のように漢語形として形成された可能性が大きい。

「八」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、半濁音化するものとしないものが併存する。原則からいえば、「八」は「八本ハッポン」のような半濁音化した数え方が予想される。しかし、数を数える際、「八」の前が「七」であることが注目される。「七」には「七本シチホン」という半濁音化しない形があったために、それとの関連で「八」にも「八本ハチホン」という半濁音化しない形が生じたと考えられる。

喉内入声音である「六」にハ行にはじまる助数詞が続く場合について見ると、原則として喉内入声音-k に続くハ行子音は半濁音化しないので、

「六」は「六本ロクホン」という数え方が期待される。しかし、「六」には半濁音化する場合としない場合「六本ロクホン・ロッポン」、両方の数え方が存在する。喉内入声音-k は「国宝コクホウ k－p (h)」「国体コクタイ k－t」「国産コクサン k－s」などに対する「国会コッカイ k－k」のように、同じ無声子音 k が後接する場合に限り促音化し、それ以外の場合は促音化しない。喉内入声音-k には「六回ロッカイ」「六区ロック」「六個ロッコ」…のように、k－k のような関係を作って促音化した数え方があったために、そこからの類推で「六杯ロクハイ」「六発ロクハツ」「六匹ロクヒキ」「六本ロクホン」…も促音化した形を生じやすかったと考えられる。すなわち、「六」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、k－k という関係になる場合に促音化し、その語形の影響で半濁音化した形「六本ロッポン」が生じたと考えられる。

次に、鼻音にハ行にはじまる助数詞が続く場合について検討する。

鼻音韻尾を持つ数詞は「三」のみである。鼻音に続くハ行子音は「心配シンパイ」「乾杯カンパイ」…のように半濁音 p になることが期待される。

先に示したハ行子音の助数詞 19 字のうち、「三」にハ行にはじまる助数詞が続く場合について半濁音 p・濁音 b・清音 h 別にまとめたものが表４である。なお、以下はごく一般的な語形に限って考察する。例えば、「三品」には「サンピン」のほか「サンヒン」という語形があっても、後者は広く用いられる語形ではないと認められるので、表４から除いてある。

表４　「三」に続くハ行にはじまる助数詞

音価	助数詞	音価	助数詞
p	敗，拍，泊，発，版，班，品，分，片，辺，編，篇，歩，方（14 字）	b	杯，分，遍，本（4 字）
		b, (h)	匹（1 字）
		p,b,h	票（1 字）
		h	——

※「分」は意味の相違によって半濁音の読みと濁音の読みになる。

表４で掲げた 19 字のうち、「三」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、基本的には原則通り半濁音 p になることが分かる。一方、「杯」「分」「遍」「本」「匹」のように濁音 b になる助数詞が 5 字、「票」のように半濁音 p 濁音 b 清音 h の 3 通りの読み方がある助数詞が 1 字存在する。ちなみに表４の 19 字に限っては、清音 h のみの助数詞は存在しない。

濁音 b になる助数詞について検討すると、漢語は歴史的に鼻音の後では「金色コンジキ」「信仰シンガウ」「強盗ガウダウ」のように連濁する傾向が認められており、その連濁のルールが影響して「三」にハ行にはじまる助数詞が続いた場合にも「三杯サンバイ」「三本サンボン」のように濁音 b になる読み方が生まれたと見なされる。

半濁音 p・濁音 b・清音 h の 3 通りの読み方が存在する「票」について見ると、

三票サン ― ビョウ　（サン ― ピョウ）（サン ― ヒョウ）

になり、「三票」は基本的に「サンビョウ」のように濁音 b で読まれる。票を数える際、「～ピョウ」「～ヒョウ」のような言い方が無いわけではないが、非標準的な形があらわれるとすれば、これは数詞と助数詞の結合の程度が低い場合であると言えそうである。

cf.　「百」の場合

「六百ロッピャク」「八百ハッピャク」　→半濁音 p

「三百サンビャク」　→濁　音 b

「七百ななヒャク」　→清　音 h

「分」は、時間を表す場合は「三分サンプン」「六分ロップン」のように半濁音 p になり、ある範囲の分量を表す場合は「三分サンブン」（例：三分する）、「六分ロクブン」（例：六分の一）のように濁音 b になる。これは意味を区別するために半濁音 p と濁音 b の違いを利用する例である。半濁音と濁音は、こういう時にこそ相互に役割を果たす能力が潜在化されていると考えてよいと思われる。

以上のように、「三」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、予想に反し

て複雑である。具体的には、「三発サンパツ」のように原則通り半濁音 p になるもの、「三本サンボン」のように濁音 b になるもの、「三票サンピョウ・サンピョウ・サンヒョウ」のように複数の読まれ方が存在するものなどである。「三」に続くハ行にはじまる助数詞 19 字を見ると、原則通り半濁音 p になる助数詞は 14 字で、「鼻音に続くハ行子音は半濁音 p になる」という原則に当てはまるものが圧倒的に多い。しかし、特定の助数詞（「三杯サンバイ」「三本サンボン」など）については連濁のルールに従うものもある。いかなる場合に連濁のルールに従うかは未詳である。非標準的な形（「三票サンピョウ・サンヒョウ」など）は、数詞と助数詞の結合の程度が低い場合にあらわれやすい。

陰類である「二」「四」「五」「九」は、母音の影響で後続するハ行子音は半濁音化しないことが期待される。しかし、「四」には半濁音化する例が見られる。これについては、「四」は「シ」という音を嫌って（「死」を連想させる）、和語「よ」に「ん」を付けて「ヨン」という漢語型の数詞に仕立てた結果、「四」には鼻音的な要素が生まれ、「四発ヨンパツ」「四分ヨンプン」…のように半濁音化する数え方が生じたと考えられる[5)]。

３．４．反例語

唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音は半濁音 p になることが原則であるが、

①濁音 b になる場合　…「昆布コンブ」など
②半濁音 p にも濁音 b にもならない場合　…「溢浮イツフ」など

のように、一般原則に従わない場合が存在する。

一方、喉内入声音と喉内鼻音に続くハ行子音は半濁音 p にならないことが原則であるが、これについても

③半濁音 p になる場合　…「北方ホッポウ」など
④濁音 b になる場合　…「銅版ドウバン」など

のように、一般原則に従わない場合が存在する。

次に、これらの漢字について順次検討していく。

最初に、①の唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢語と、④の喉内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢語を掲げる。

表５　①唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢字

漢字	p になる漢語の例	b になる漢語	漢字	p になる漢語の例	b になる漢語
配	心配シンパイ	按配アンバイ	餅	月餅ゲッペイ	煎餅センベイ
		軍配グンバイ	抱	襟抱キンポウ	辛抱シンボウ
版	絶版ゼッパン	鉛版エンバン	訪	詢訪ジュンポウ	探訪タンボウ
布	湿布シップ	昆布コンブ			

表５より、本調査の範囲内において唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢字は 6 字、漢語は 7 語に限られる。表５では p になる語例は 1 例のみ示したが、全体を確認するためにすべて掲げ、b になる漢語と対比させると、

配　p 心配シンパイ　分配ブンパイ　年配ネンパイ　（軍配グンパイ）
　　b 按配アンバイ　軍配グンバイ

版　p 出版シュッパン　活版カッパン　新版シンパン　絶版ゼッパン
　　凸版トッパン　原版ゲンパン
　　b 鉛版エンバン

布　p 散布サンプ　湿布シップ　発布ハップ　宣布センプ　頒布ハンプ
　　分布ブンプ　綿布メンプ
　　b 昆布コンブ

餅　p 月餅ゲッペイ
　　b 煎餅センベイ

抱　p 襟抱キンポウ
　　b 辛抱シンボウ

訪　p 詢訪ジュンポウ
　　b 探訪タンボウ

※下線は重複する語形が認められる漢語を示す（以下同）

のようになる。「配」「版」「布」を見ると、原則通り p になる漢語のほうが圧倒的に多い。「軍配」はすべての辞書が濁音形の「グンバイ」を認めているが、『新選漢和辞典』は「グンバイ」と「グンパイ」の両形を認めている。「餅」「抱」「訪」は半濁音化する漢語としない漢語が 1 例ずつしか存在しないため、原則通り半濁音化する漢字か否かは明確にすることができない。b になる漢語を見ると、「昆布」「煎餅」「辛抱」など、生活の中にとけ込んできた日常語が目立つ。表５の b になる漢語はすべて鼻音に続くハ行子音であることから、いわゆる連濁によって生じた語形が生き残っていると考えられる。

次に、④の喉内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢字について見ると、表６のようになる。

表６　④喉内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音ｂになる場合がある漢字

漢字	pにならない漢語の例	bになる漢語	漢字	pにならない漢語の例	bになる漢語
版	木版モクハン	銅版ドウバン 石版セキバン	風	北風ホクフウ	中風チュウブウ 屏風ビョウブ
兵	伏兵フクヘイ	精兵セイビョウ	法	合法ゴウホウ	明法ミョウボウ
品	薬品ヤクヒン	上品ジョウボン			

表６より、濁音ｂになる場合がある漢字は５字、漢語は７語に限られる。この５字も先に示したように、原則通り半濁音ｐにならない漢語をすべて掲げ、ｂになる漢語と対比させると、

版　h 凹版オウハン　重版ジュウハン　木版モクハン　銅版ドウハン
　　b 銅版ドウバン　石版セキバン

兵　h 伏兵フクヘイ　用兵ヨウヘイ　精兵セイヘイ
　　b 精兵セイビョウ

風　h 東風トウフウ　北風ホクフウ　洋風ヨウフウ　悪風アクフウ
　　強風キョウフウ　狂風キョウフウ　学風ガクフウ
　　清風セイフウ　中風チュウフウ　屏風ヘイフウ
　　b 中風チュウブウ　屏風ビョウブ

品　h 商品ショウヒン　賞品ショウヒン　名品メイヒン　作品サクヒン
　　食品ショクヒン　薬品ヤクヒン　上品ジョウヒン
　　b 上品ジョウボン

法　h 刑法ケイホウ　商法ショウホウ　方法ホウホウ　暦法レキホウ
　　用法ヨウホウ　明法メイホウ
　b 明法ミョウボウ

のようになり、表 6 に掲げた漢字 5 字は原則通り半濁音化しない漢語のほうが圧倒的に多いことが分かる。ちなみに、濁音 b になる漢語には「銅版ドウハン」「精兵セイヒョウ」「上品ジョウヒン」…のように濁音 b にならない読みも認められる。「銅版」「石版」を除く 5 語を見ると、

精兵	中風	屏風	上品	明法
セイビョウ	チュウブウ	ビョウブ	ジョウボン	ミョウボウ
セイヘイ	チュウフウ	ヘイフウ	ジョウヒン	メイホウ

のようになる。このうち、「屏風ビョウブ」「上品ジョウボン」「明法ミョウボウ」は、「呉音＋呉音」の構成で、濁音は連濁によるものである。「中風」は「中」「風」共に呉音・漢音が同形と認められるから、「中風チュウブウ」も呉音の連濁形と推定することが許される。「精兵セイビョウ」は、唯一「漢音＋呉音」の構成になっているが、この場合も連濁形である。以上から、濁音 b になるのは「銅版」「石版」を除いて全てが呉音で連濁によるものである。すなわち、これらは古い呉音の連濁形が伝統的に使われ続けられているものと解される。

「銅版ドウバン」「石版セキバン」については、同韻である「板」が「～板（～バン）」のように慣用的に濁音形で使用され、その類推によって生じた可能性がある。

次に、②の唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が半濁音 p にも濁音 b にもならない漢語を掲げる。

表７　②唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が半濁音ｐにも濁音ｂにもならない場合がある漢語

漢字	pになる漢語	pにもbにもならない漢語	漢字	pになる漢語	pにもbにもならない漢語
浮	——	溢浮イツフ A	浦	——	烟浦エンホ A
沸	——	畢沸ヒツフツ B	攀	——	牽攀ケンハン A
捕	——	擒捕キンホ A	柏	——	扁柏ヘンハク A
畔	——	枕畔チンハン C	坂	——	峻坂シュンハン A （峻坂シュンパン B）
覆	転覆テンプク 反復ハンプク	掩覆エンフウ A （掩覆エンプ B）	避	——	遁避トンヒ A （遁避トンピ B）
憑	信憑シンピョウ	文憑ブンヒョウ C	賓	——	燕賓エンヒン A
疲	——	昏疲コンヒ A			

※A は『新字源』，B は『新選漢和辞典』，C は『学研新漢和大字典』に収録されている漢語を示す

表７のように、唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が半濁音ｐにも濁音ｂにもならない漢字は 13 字、漢語は 13 語である。本調査の範囲内において、「覆」「憑」を除く 11 字の漢字には、ｐになる漢語は見られない。ｐにもｂにもならない漢語について見ると、「溢浮イツフ」「擒捕キンホ」「昏疲コンヒ」「烟浦エンホ」「牽攀ケンハン」「扁柏ヘンハク」「峻坂シュンハン」「燕賓エンヒン」は『新字源』にのみ収録、「畢沸ヒツフツ」は『新選漢和辞典』にのみ収録、「枕畔チンハン」「文憑ブンヒョウ」は『学研新漢和大字典』にのみ収録されている。調査した 3 種の辞書に限定すると、「掩覆」「峻坂」「遁避」の 3 語を除いて複数の辞書に立項されている漢語は見られない。このことから、これらの漢語は極めて使用例が限られた語であると推測できる。注目すべきは、『新選漢和辞典』では「掩覆エンプ」「峻坂シュンパン」

「遁避トンピ」のように原則通り p 音形が認められる漢語が、『新字源』では「掩覆エンフウ」「峻坂シュンハン」「遁避トンヒ」のように p 音形が認められないことである。

以上から、表７に掲げた殆どの漢語は通常、辞書の見出しとしてしか目にふれない極めて稀な単語であるために、いわゆる口頭語形（というのは、話されたり読まれたりする語形）が得られないので、辞書ではその漢字に逐字的な読みが示されたことによる結果だと推測できる。特に『新字源』には、その性格が顕著に現れている。

最後に、③の喉内入声音と喉内鼻音に続くハ行子音が半濁音 p になる場合がある漢語を掲げる。

表８　③喉内入声音と喉内鼻音に続くハ行子音が半濁音 p になる場合がある漢字

漢字	p にならない漢語の例	p になる漢語	漢字	p にならない漢語の例	p になる漢語
迫	脅迫キョウハク	逼迫ヒッパク	歩	競歩キョウホ	独歩ドッポ
方	平方ヘイホウ	北方ホッポウ	腑	——	六腑ロップ

表８より、喉内音に続くハ行子音が半濁音 p になる場合がある漢字は 4 字、漢語は 4 語のみである。ちなみに、本調査の範囲内においては p になるすべての漢語は喉内入声音にハ行子音が続く場合であり、喉内鼻音に続くハ行子音は p にならない。

「逼迫ヒッパク」について見ると、「圧迫アッパク」「切迫セッパク」のように同じ漢字が唇内・舌内の入声音の後で促音化を起こし、それからの類推で例外的に半濁音 p の語形が生じたと推測される。「北方ホッポウ」は、「南方ナンポウ」に合わせて半濁音化した語形であると解される（半濁音化に伴って促音化も生じている）[6]。「独歩ドッポ」は、助数詞（「一歩イッポ」「六歩ロ

ッポ」など）からの類推で生じた語形と考えられる。「六腑ロップ」は、「五臓六腑ゴゾウロップ」のように一語化された漢語である。以上のように、喉内音に続くハ行子音が半濁音 p になる漢語は、ほかの漢語からの類推や類推による統一によって例外的に生じた漢語であると見なされる。

以上、半濁音化のルールに従わない漢語について個別的に眺めたが、このうち①④は連濁の影響によるものと推測できるもの、②は極めて使用例が限られた漢語であるためにその漢字に逐字的な読みが示されたと推測できるもの、③はほかの漢語からの類推や類推による統一によるものと推測できるものが目立つ。反例語にはそれぞれ理由の認められるものが多く見られる。但し、量的に見ると反例語の数は決して多くない。

４．おわりに

本稿では、現代漢語における半濁音化の実態について調査し、それをもとに半濁音化する条件を分析し、例外として認められる助数詞・反例語についても考察を加えた。

現代漢語に用いられる頻度が高い約 3,000 字の調査では、唇内入声音-p・舌内入声音-t および唇内鼻音-m・舌内鼻音-n に続くハ行子音は半濁音化し、喉内入声音-k と喉内鼻音-ŋ に続くハ行子音は半濁音化しないという規則性が認められる。

入声音に続くハ行子音が半濁音化する場合は、促音化を伴う。その理由は、唇内入声音-p に関していうと、唇音性を保存することができる p－p (Φ) のような関係が、半濁音化する条件であると同時に促音化するための条件であるからと考えられる。舌内入声音-t の場合は、促音化して後続子音 p (Φ) との間に p－p (Φ) のような関係を作ることができたため、半濁音化したと推測できる。従って、半濁音化と促音化は一体となった関係であるということができる。一方、喉内入声音-k は入声音-p, -t, -k の中で最も早く開音節化したために、後に続くハ行子音は半濁音化しなかったと推定できる。すなわち、喉内入声音の場合は早い段階で ki, ku のように開音節化してし

まったために、半濁音化の条件である p－p (Φ) のような関係を作ることができなかったと考えるのが妥当である。唇内鼻音-m と舌内鼻音-n に続くハ行子音も半濁音化する。その理由は、両者は日本語化の過程を通じて撥音/N/となり鼻音性が保存され、撥音/N/は後続子音 p (Φ) の影響を受け、m－p (Φ) のような相互に唇音性を保存できる関係を作ることができたためと考えられる。一方、喉内鼻音-ŋ は半濁音化の発生以前に非鼻音化したために、後に続くハ行子音は半濁音化しなかったと推定できる。すなわち、喉内鼻音の場合は-i, -u のように非鼻音化してしまったために、半濁音化の条件である m－p (Φ) のような関係を作ることができなかったと考えるのが妥当である。半濁音化の条件、すなわち「p－p (Φ) もしくは m－p (Φ) のような関係を作ることができる場合のみ半濁音化する」という原則から、従来「半濁音化」と考えられていた p 音は、本来の唇音 p の残存であると認める余地がある。

ハ行にはじまる助数詞が半濁音化するか否かは、原則に反するものが多い。その理由の一つは、固有語（日本語）が用いられる数詞の数え方に原因があると考えられる。例えば「七（ななハツ→シチハツ）」は、固有語を含む形式の影響で、原則に反して半濁音化しない語形が生じたと推定できる。なお、「三」に続く助数詞には「三本サンボン」「三杯サンバイ」のように連濁のルールに従うものが僅かに存在する。

例外として認められる反例語は、量的に見るとごく僅かである。そのうち、「昆布コンブ」「屏風ビョウブ」などは連濁の影響によるもの、「溢浮イッフ」「畢沸ヒッフッ」などは極めて使用例が限られた漢語であるためにその漢字に逐字的な読みが示されたもの、そのほか「北方ホッポウ」のようにほかの漢語からの類推によって統一されたものなどがあり、反例語にはそれぞれ理由の認められるものが多く見られる。

以上、現代漢語における半濁音化の実態を明らかにしたが、それに伴って半濁音化の条件を検討するには「濁音化」との関連も検討すべきことが明らかになった。いかなる場合に連濁のルールに従うのか、これについて

は稿を改めたい。

＜註＞

1) 本稿ではハ行音のみを調査の対象とする。例えば「板ハン・バン」のようにハ行音のほかにバ行音の読みも認められる場合、バ行音は調査の対象外とする。
2) 漢和辞典によっては読み仮名が記されていない場合もあるため、その漢語については「新村出編（2008）『広辞苑（第六版）』岩波書店」で読みの確認を行う。
3) 但し、舌内入声音-t には「溢浮ィッフ」「畢沸ヒッフッ」のように、例外的に半濁音化しない漢語も存在する。これについては、章を改めて検討する。
4) このほか「二（èr→liǎng）」、「九（jiǔ→gǒu）」、「十（shí→dòng）」にも特別な読み方が存在し、軍事用語から鉄道・航空など、数字（番号）を混同なく正確に伝達する必要のある分野に拡大している。
5) 「四」には、「ヨンー」形のほかに「シー」形の数え方も見られる。例：「四辺（ヨンヘン・ヨンペン・シヘン）」
6) このほか、「前半・後半」のような対になる漢語にも一般原則に反して読まれる語形が認められる。「前半」は「ゼンパン」と読まれることが期待されるが、「後半コウハン」は半濁音 p にならないため、それに合わせた語形「前半ゼンハン」が使用されている。

＜引用文献＞

小松英雄（1981）　『日本語の世界 7 日本語の音韻』pp.275-276 中央公論社

＜参考資料＞

『韻鏡校注』　藝文印書館（1982 年影印本）（龍宇純著）
『学研新漢和大字典』　学習研究社（2005）（藤堂明保・加納喜光編）
『角川新字源（改訂版）』　角川学芸出版（1994）（小川環樹ほか編）
『広辞苑（第六版）』　岩波書店（2008）（新村出編）
『校正宋本広韻』　藝文印書館（1986 年影印本）
『常用漢字表』　平成 22 年内閣告示第 2 号（2010）
『新選漢和辞典（第七版）』小学館（2003）（小林信明編）
『表外漢字字体表』　国語審議会（2000）

＜付記＞

本稿は、聖徳大学の林史典先生から御教示をいただいた外、本学の蒋垂東先生の御厚意にあずかった。記して感謝の微意を表したい。